

一人称に確実性があると言うことはいかなることか？

榎野沙央理(千葉大学大学院博士後期課程)

最晩期のウイットゲンシュタインが残した草稿『確実性について』は、私たちが当たり前のこと・常識的なことだとみなしている事柄を考察するものである。その事柄とは例えば、「私はここに手があることを知っている(Ich weiß, dass hier eine Hand ist) (ÜG 19) や「私はここに私の手があることを知っている(Ich weiß, dass dort meine Hand ist) (ÜG 40)といった文によって表現される事柄である。(これらの文は、ウイットゲンシュタインがムーアの「常識の擁護」や「外在世界の証明」の影響を受けて考え出したものであり、ムーア自身の表現とはやや異なっている。) 私たちはこの事柄を、一人称がその身体に対してもつとされる特権と呼ぼう。

一人称がその身体に対してもつとされる特権は、これまでの議論では、一人称がその身体について行う言明はどのような確実性をもつか、という仕方でも問題にされてきた。つまり、一人称がそれ自身の体(例えば手)について知覚しているとか、それが存在することを知っているとか言うとき、その言明の確実性はいかなるものであるかということが問題とされてきた。その回答として、一人称の言明の無謬性や、その種の言明に私たちの信念を支える蝶番命題(または世界像命題とも呼ばれる)としての位置付けがあることが説明されてきた。(cf. Ohtani 2018; 大谷 2013; 山田 2009)

一人称がその身体について行う言明がどのような確実性をもつかを検討することは、ウイットゲンシュタインの『確実性について』がどのような仕方でも、私たちが当たり前のこと・常識的なことだとみなしている事柄を、考察するかについて大まかな見取り図を与えてくれる。

しかしながら、一人称がその身体について行う言明にある種の確実性があると言うとき、そもそも、一人称がその身体にある種の確実性があると言うことが、例えば「私はここに手があることを知っている」等々の言明の使用をどう決めるかまでは明示的にされてこなかった。例えば、今ここである人が『私はここに手があることを知っている』という言明を確かなものであるとみなすと宣言するとしよう。この宣言は、『私はここに手があることを知っている』という言明を疑いの対象から外すとか、この言明から導出できるものだけを信じるとか、この言明を規則にしたゲームを考えたいとかいったことまでであれば、同時に宣言していると認めてもいいかもしれない。しかしながら、この宣言によって人が何をしようとし、何をすることができるかまでは明示化されたとは言いがたい。先の例で言うならば、『私はここに手があることを知っている』という言明を規則にしたゲームを考えたいと宣言したとしても、これによって、そのゲームの内実が与えられたとは言いがたいのである。

もし、一人称がその身体について行う言明にある種の確実性があると言いたいのであれば(もしくは、このことを前提にしてその確実性の内実を問いたいのであれば)、一人称がその身体にある種の確実性があると言うことによって、人が何をしようとし、何をすることができるかまでも明晰化していく必要がある。

本稿では、ウイットゲンシュタインの『確実性について』を頼りに、人が『私はここに手があることを知っている』という言明を確かなものであるとみなすと宣言するとき、この言明の使用をどう決め

うるかのプロセスを明らかにしていく。すなわち、この言明を使って何をしようとするか(動機)を明示化し、何をすることができるかを考察していける(言明がもつ能力の創出)、自己明晰化を行いたいと思う。

これにより、ウイットゲンシュタインの『確実性について』をヒントに、私たちがある事柄を確かだとみなすということについて、対となる二つの描像を手に入れることができることが期待される。ひとつ目は、ある事柄(他者の心の有無・生徒が教えた通りに振る舞うかどうか)の確かさを担保するものが何かしらあり、人はそれを見つけて出し説明するのだという描像である。ふたつ目は、ある事柄の確かさは、ある事柄にどのような確かさを見て取るかを構築するプロセス・手法が成立することなのだという描像である。

ふたつ目の描像は、ひとつ目の描像を退けるためのものではなく、むしろ、ひとつ目の描像と対で用いるためのものである。二つの描像を対で用いることで、ひとつ目の描像において行なっていることが何であるかを自身に対して明晰化することができ、結果として、人がある事柄を確かだと言うときに、どのような動機によって、どんな前提や規則を採用しながら、ある事柄を確かなこととしていくのかを明らかにすることができる。

このように本稿では、私たちが当たり前のこと・常識的なことだとみなしている事柄について、それらを与えられ押し付けられることとしてではなく、私たち自らその確実性から始まるプロセスをたどることができるようなこととして考察していきたいと思う。

参考文献

- Moore, G. E. (1993). *G. E. Moore: Selected Writings*. ed. by T. Baldwin. Routledge.
- Ohtani, H. (2018). "World-Pictures and Wittgensteinian certainty". *Metaphilosophy*. 49(1-2). pp. 115-136.
- Wittgenstein, L. (1984). *Über Gewißheit*. Suhrkamp.
- 大谷弘(2013).「像としての常識——『確実性の問題』と世界像——」. 『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』. (3). pp. 179-190.
- 山田圭一(2009).『ウイットゲンシュタイン最後の思考: 確実性と偶然性の邂逅』. 勁草書房.